

# 愛知の文庫活動

## ——その変遷と可能性——

織 田 まゆみ

文庫とは、個人またはグループが、家族の一室や集会室などに子どもの本をおき、子どもたちに開放する活動である。子どもの身近に本をおくことで、読書の喜びを伝えていくことが、その中心目的といえる。外国の図書館関係者にも関心をもたれるほど日本全国にひろがった、この日本独自と思われる文庫活動は、どのように誕生し、どのような性格をもっていたのだろうか。本稿では、文庫活動の全国的な動きも射程にいれつつ、愛知県での文庫活動がどのような変遷をたどって今日にいたっているのか、そして明らかに最盛期を過ぎ、往年の活発さは見られなくなったと思われる現在の文庫活動に、可能性はあるのかという問題を考えてみたい。

### I

子どものための文庫の始まりは、1906年、児童文学者竹貫佳水が、東京千駄谷の自宅に開設した竹貫少年図書館という<sup>(1)</sup>。多分その他にも、地域の篤志家、子ども会、寺院、神社などでの文庫活動も行われたように推測されるが、記録はない。しかし、現在のような形での家庭や地域でおこなわれる文庫の活動形態は、戦後50年代になってからでてきて、60年代以降全国的に広がったといっていよう。

50年代そしてそれに続く60年代といえ、戦後直後の混乱が一応落ち着き、高度経済成長に入りはじめた頃であり、様々な社会運動、文化運動が大衆的にでてきた時代であった。また、ベビーブームでの赤ちゃんが、少年少女となり、子どもをとりまく諸々を意識せざるをえない時代でもあったといえよう。つまり、この時代の子どもの親たちは、自分達の親の世代の子育て観とは、戦前と戦後という断絶があるだけでなく、子どもをとりまく社会状況の急激な変化に、いかに対応するかという問題も迫られていたのである。

その状況とは、まず、テレビに代表されるような商業主義的な働きを、子どもたちが直接的にこうむり始めたという問題であろう。テレビ放送は53年に開始され、64年の東京オリンピックを契機に視聴台数が急上昇したが、子どもたちの外遊びの時間を奪うだけでなく、「鉄腕アトム」の出現を契機

に、テレビ漫画時代を迎え、その内容が商品とタイアップして子どもの購買意欲をあおったり、暴力的な、あるいは俗悪・低俗な番組も横行していったことが問題となった。つまり、大人のフィルターを通すことのできない刺激を子どもが浴びるという状況が生まれたのである。また、戦後まもなくから、漫画中心の雑誌が続々と創刊されていたが、60年代前後に、「週刊少年マガジン」「週刊少年サンデー」「週刊少女フレンド」「週刊少女マーガレット」などの週刊誌化がおこなわれ、読者層を拡大していく動きも大人に危機感をもたらしたといえよう。

さらに、増加する子どもが市場として意識されるようになると、児童図書の出版が盛んになったが、多くの出版社が量産に力をいれたため、明らかに質の低いものも多くみられた。子どもや親が本を直接手にすることのでき、専門的な司書によるサービスをうけることのできる図書館も、圧倒的に不足しており、子どもに本を媒介する大人は、何を選んだらよいのか困惑する状況もあった。加えて、子どもの本の原作者の立場からみれば、新しい子どもの視点にたつ児童文学作品の創造が活発になっているにもかかわらず、それがなかなか読者に届かないという悩みもあった。つまり、既存の「名作」ばかりの出版を批判し、創作作品を流通させるためにも、読み手を育成したいという願いがあったのである。

以上、文庫活動がうまれてくる頃の子どもをとりまく環境を概観したが、このような状況からでてくるものは、まず、悪いものを排除して子どもを守るという意識であり、さらに、子どもにより良質なものを提供したいという要求であろう。子どもの本に関していえば、一方で「悪書追放運動」、もう一方で読書運動の興隆がそのあらわれである。後者は、60年、鹿児島県立図書館長椋嶋十が提唱した「親子20分間読書」運動がその代表であろう。これは、図書館が貸し出す本を、一日20分ぐらい子どもが声をだして読むのを母親がきくというもので、たちまち全国に普及した。さらに、65年、石井桃子が自宅で開いた「かつら文庫」での経験をふまえて書いた『子どもの図書館』の出版が、直接的に文庫開設気運のきっかけとなっていった。

石井は、かつら文庫を開設にいたった動機を次のように記述している。<sup>(2)</sup>

昭和二十九年から三十年にかけて、私は欧米の子どもの本の出版事情や児童図書館の活動をみるために外国へいく機会を得ました。そして、まわってきた国々では、児童図書館というものが、よい創作活動を推進し、またその結果を本にする出版事業の支えとなり、さらにまた、その本を直接子どもの手にとどけるという三つの仕事を一つでひきうけている。べつのことばでいえば、この五十年間、子どもの示す反応から学びながら、本の標準を高め、それを堅持してきたのは、児童図書館の大きな功績だということを見ました。(4)

しかし、帰国後日本の状況を見ると、作家も、出版社も、自分たちの活動が子どもたちにどのように評価されているか検証する場をもっていないので、同じような「名作全集」がでてきては消えていくということがくりかえされている。これは、子どもにとって、貴重な時の損失である。「子どもは、ほんとうにかちっとした歯ごたえのある精神的なごちそうをたべたという満足を経験しないで、子ど

も時代をすごしてしまう」(6)のである、と子どもをとりまく環境を批判し、まず「子どもと日本に出ている本をいっしょにおいて、そのふれあうところを見、何かを考えることからはじめよう」(6)という思いで文庫を始めたとしている。

この石井の著書は、当時の子ども達をとりまく本の環境がいかに劣悪かを示し、「ポストの数ほどの図書館を」と訴えただけでなく、家庭文庫という一見ささやかにみえる活動と、そこでの子どもたちの変化を具体的に記述することで、主に母親たちの「私もやってみたい」という意欲をひきだしたといえよう。これは、戦後はじめて法的に男女平等となった女性たちの力が、まず母親運動としてでてきたと解釈することも可能だろう。

このような土壌から、文庫活動は急速に発展していくのだが、80年には、全国で4557の文庫があるとされた<sup>③</sup>。そして、文庫相互の情報交換、経験交流、連絡の必要から、地域での文庫連絡会が生まれ、さらに全国的な組織も生まれていく。そのひとつが、70年に結成された親子読書地域文庫全国連絡会である。結成の直接のきっかけは、日本子どもの本研究会主催の講座で「母親と教師がともに地域に根ざした親子読書の輪を広げ更には、図書館員とも手をつなぎ読書環境の充実をめざす」ことの重要性を確認、その交流のために全国的組織をつくろうという提案がなされたことによる<sup>④</sup>という。

## II

さて、愛知県の文庫活動では、63年、名古屋市北千種町(現若水町)で、国家公務員住宅にあった「なかよし文庫」が最初といわれる。名古屋市立図書館司書で、特に名古屋市の文庫活動と関わりの深い小木曾真によると、65年ごろから、千種区西山で、「仲よし文庫」「青空文庫」など7つの文庫があいついで開設され、68年には「西山地区文庫の会」が結成されており、また、家庭文庫である「あまの文庫」(千種区 67年)、鳴海団地の保育の会から生まれた「仲よし文庫」(緑区 66年)、平針県営住宅「チューリップ文庫」(現天白区 68年)などが比較的初期に開設されたという<sup>⑤</sup>。名古屋市以外では、井上文庫(瀬戸市 69年)、江南団地自治会文庫(江南市 69年)、半田なかよし文庫(半田市 74年)などができてきて、全国と同様、愛知県でも70年以降に開設された文庫が飛躍的に増加した。

『年報子どもの図書館1975年版』によれば、74年で、名古屋市25、春日井市7、豊田市6、尾西市9の文庫があり、他は安城市・一宮市・稲沢市・大府市・江南市・津島市・東海市・豊橋市・半田市・海部郡・北設楽郡・西加茂郡でそれぞれ1で、県全体で59であるが、子ども会運営と推測されるところが13あることが特徴といえよう。『年報子どもの図書館1981年版』によれば、80年、名古屋市43、西加茂郡12、瀬戸市6、春日井市5、海部郡4、豊明市3、半田市3、岡崎市3、刈谷市3、尾西市2、豊橋市2、江南市2、愛知郡(日進)2、知多郡2の文庫があり、あとは、一宮・小牧・尾張旭にそれぞれ1つで、全県的には115という調査結果がなされている。70年代中盤からの6年間で2倍に近い増加であるが、新旧交代も多いといえる。だが、世話人所在地と文庫所在地が同一であることから、家庭文庫と推測されるものが約40を占め、確実に増加している。

文庫の増加につれ、文庫連絡会も結成され、87年当時で、名古屋文庫連絡会(72年結成 45文庫加

盟)、春日井文庫連絡会(77年結成 20文庫)、岡崎文庫連絡会(84年結成 5文庫)西尾文庫連絡会(85年結成 4文庫)、知多文庫連絡会(10文庫)、日進町子ども文庫連絡会(83年結成 5文庫)などがあった<sup>(6)</sup>。互いに情報交換をしたり、勉強会・講演会等の企画・運営、あるいは行政などへの要求活動を共同して行なうなどの役割をはたしてきたと思われる。

名古屋文庫連絡会の場合であるが、会の目的を「名古屋市内各子ども文庫の経験交流と勉強の会、図書館職員と意見交流の場」としているように、隔月ごと、講師など招いて研修活動を行っていた。しかしそればかりではなく、市民運動、住民運動としての「運動体への発展」の可能性ももっていたのである。このあたりについて、天白ミニ文庫の奥田睦子は次のように発言している<sup>(7)</sup>。

開いたばかりのささやかな文庫に、たちまち百人を超える数の子どもたちが押しかけたりする状況や、子どもたちのためとは言っても、本に関心のない大人まで動員しなくては運営して行けない地域文庫が各地にできていることは、公共図書館の不備に原因のあることが、はっきりしてきました。初めは遠慮がちだった文庫のつどいのお母さんたちも、“今の子どもは本を読まない”なんて嘘で、本さえあれば、子どもの読書力は、大人をあきれさせるのど旺盛なものだ、ということを感じ、その勢いに押されて、これはどうしても行政とかけあって、文庫に援助してほしい、本を団体貸出ししてほしい、図書館を増設してほしい、などの要求を容れてもらわなければならない、という意見が芽生え、話し合う中でその意見に同調する人がふえて、運動の気運が盛りあがってきたのでした。

74年に入って、まず図書館に対して、貸出しの改善など文庫への理解と援助をもとめ、さらに、名古屋市に対し、文庫への資金援助などの要望書を、6000人を超える署名を添えて提出した。翌年だされた名古屋市の返答は、直接の資金援助はできないということであったが、図書館の巡回文庫を充実し、100万円の枠内で、文庫の希望する本を購入しそれらを貸し出すという内容だった。そして、市内の天白図書館、名東図書館新設においては、ワンフロア式、読み聞かせの部屋、児童コーナー、身障者への配慮などの要望を、文庫関係者が積極的にだしていくことで、よりよい図書館づくりに大いに貢献した。

また文庫は、その経営主体によっても、蔵書数、対象の子ども数からいっても、多種多様なのだが、75年当時で共通する運営上の悩みに関して、小木曾真は「①本が少ないこと ②開設場所に適当な場所がないこと ③世話人のなり手が少ないこと」の3つを共通のものとしてあげている<sup>(8)</sup>。そして、名古屋市の文庫に関してであるが、近くに図書館ができると文庫が廃止されたり、新興住宅地での自治会など地域主体型の文庫がふえたが、運営がもちまわりのため経験の蓄積ができない、などの問題もあり、図書館の肩代わりという役目以上に、文庫独自の機能を追求できないというジレンマもあったのである。

しかし、80年代にはいと、全国的な傾向として、子どもの減少が意識されるようになる。確かに0～14歳の人口は、1955年の30,123,000人から、70年代の第2次ベビーブームを経て、75年

図1 公立図書館設置市町村



『年魚市』第12号(1997)より

27,221,000人、85年26,033,000人、95年20,014,000人と減少傾向にあり、総人口のうち、0～14歳の子どもたちが占める割合も、55年の33.4%から、75年24.3%、85年21.5%、95年15.9%と減少し、明らかに年齢構造が変化してきている<sup>(9)</sup>。また80年代は、生まれた時からテレビが家にあったという世代がそろそろ親になりつつあり、レンタルビデオも普及しだした時代でもあった。学習塾にいく子どもが多くなったと以前からいわれていたが、小学3年生で、76年7.5%だったのが、85年では12.9%（ちなみに、93年では17.5%）と増加している（文部省「学習塾に関する実態調査」）。そして、83年のファミリーコンピュータの出現が、すっかり子どもたちを魅了してしまったのである。

文庫にくる子どもの総数が減り、代わりに母と幼児の参加が目立つようになった。ここには、本だけが目的でなく、文庫で母も子も仲間をつくりたい、あるいは、子育ての先輩である人と接したいという願いがあるようだ。家庭文庫「たちばな文庫」（71年開設 名古屋市千種区）によると、母親の口

表1 愛知の文庫数

自治体名	1969年	1974年	1980年
安城市		1	1
一宮市		1	1
稲沢市		1	
大府市		1	
岡崎市		3	3
尾張旭市			1
春日井市		7	24
刈谷市			3
江南市		1	2
小牧市			1
瀬戸市			6
津島市		1	
東海市		1	
豊明市			3
豊田市		6	
豊橋市	2	1	2
名古屋市	3	25	43
半田市		1	3
尾西市		9	2
愛知郡(日進町)			2
海部郡		1	4
北設楽郡		1	
知多郡			2
西加茂郡(三好町)		1	12
計	5	59	115

『年報子どもの図書館』(児童図書館研究会編)による

表2 都道府県別にみた子ども文庫数

都道府県名	1981年	1993年	都道府県名	1981年	1993年
北海道	95	49	滋賀	40	94
青森	8	13	京都	48	69
岩手	13	25	大阪	142	116
宮城	46	36	兵庫	51	52
秋田	7	9	奈良	17	43
山形	15	14	和歌山	20	24
福島	33	60	鳥取	22	26
茨城	75	65	島根	4	6
栃木	16	20	岡山	23	18
群馬	29	14	広島	17	34
埼玉	86	92	山口	33	25
千葉	92	85	徳島	4	6
東京	221	164	香川	15	13
神奈川	181	158	愛媛	9	13
新潟	27	17	高知	7	14
富山	33	16	福岡	63	121
石川	8	16	佐賀	8	11
福井	3	16	長崎	60	17
山梨	121	21	熊本	7	19
長野	32	32	大分	6	3
岐阜	14	37	宮崎	3	11
静岡	41	57	鹿児島	16	30
愛知	55	55	沖縄	6	17
三重	6	25	合計	1878	1888

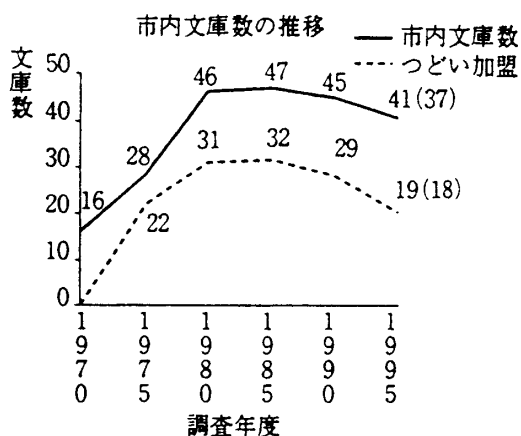
『子どもの豊かさを求めて——全国子ども文庫調査報告書』による

コミなどで、他地域、他区からもメンバーがきているという。

また、従来の本を中心にした活動から、異年齢集団としての子ども達への遊び場提供、本以外のあそびや活動の模索などを試みていく文庫もでてきた。つまり、工作、料理、実験、遠足などをやってみたり、連絡会での文庫まつりなどである。さらに、文庫で子どもを待つのではなく、これまで培った経験をいかして、おはなし会や読み聞かせの「出前」活動を始めたところもある。そして、文庫相互だけでなく、様々な活動とのネットワークづくりができてはじめてきたことも特徴である。おはなし・人形劇・読み聞かせ・子どもの本研究会などが、文庫活動の中から生まれ、文庫と交流をもっていたりしている。たとえば、大府市では、図書館のボランティア講座への呼びかけから始まったO. L. V. (大府市中央図書館ボランティアグループ) は、文庫を含む市内の自主的グループを結び、学習会・講演会の企画、運営だけでなく、絵本や幼年童話のガイドブックの出版をするなど、精力的な活動を続けている。

しかし、文庫活動だけを考えた場合、かつての勢いをもっていないことはだれもが認めることだろう。もともと文庫活動は、自分の子どもの成長とともに、始めてやめていくという性格の強い活動でもあるので、家庭文庫の場合は廃庫、地域文庫の場合は後継者が育たなくなったことが、運営主体からみた衰退の原因である。働き続ける女性やパート労働の増加などによって、以前のようなタイプの地域の担い手がなくなったことも、一般的な傾向であろう。愛知県全体の文庫の数の調査では、全

図2 名古屋市内の文庫数



注：1995年の文庫数の（ ）内は、調査対象の定数を従来通りに考えた時のもの。  
 小木曾 真『名古屋市内の子ども文庫』  
 名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No. 12 (1997) より

国子ども文庫調査会報告書が一番新しい資料なのだが、この調査は、81年調査<sup>(10)</sup>で55、93年調査<sup>(11)</sup>でも55としている。それぞれの全国合計文庫数は、1878、1888であり、地方によって増減がみられるが、愛知県の場合は横ばい状態という。しかし、『子どもの年報1981年』では80年の調査での愛知県の文庫数を114としているので、全国子ども文庫会調査書の81年が55というのは、ちょっと納得がいかない気がする。また、小木曾真が5年ごとに調査した名古屋市の文庫数の推移は、70年から5年ごとに、16、28、46(80年)、47、45、37(95年)なので<sup>(12)</sup>、新旧交代があるとしても、減少傾向は全県的なものだと考えたほうが自然であろう。

### III

以上、文庫の誕生から増加、文庫への援助や公共図書館サービス充実をもとめる運動が高まった時期から、利用する子どもの減少と文庫の減少、本以外の活動の導入、他の関連した諸活動との連携、ネットワークなど、文庫活動の変遷をたどってみた。この変遷にはいくつかの特徴が考えられる。

まず、文庫が出現せざるをえなかった社会的条件が変化したということである。全国の公共図書館総数は、65年で773（児童室・コーナーの設置率は36.2%）にすぎないのに対し、90年には、総数1928（児童室・コーナー設置率83.5%）である<sup>(13)</sup>。愛知県でも、公共図書館は、66年で21の自治体であり、県内の市の72.8%、町は9.6%、村はどこももっていなかったが、96年では、88市町村のうち54市町村にあり、31市のすべて、町は47のうち22町（46.8%）、村は10のうち1村と、この30年間で図書館の数は増加した<sup>(14)</sup>。また多くの図書館で、児童図書を全蔵書の4分の1から3分の1揃えていることも、図書館にいけば児童書があるという状況をつくりだした。さらに、同じような「名作」ばかりという出版状況も改善されたといってよいだろう。したがって現在も、石井桃子が望んだような「ポストの数ほどの図書館」はないにしても、当時ほど、文庫の存在に必然性、緊急性がなくなったのは当然である。しかし、この改善された現状は、図書館要求運動の一翼を担った文庫活動の努力の結果でもあるのだ。

次に、60年代に問題になったテレビ、漫画雑誌といったメディアだけでなく、80年代からのビデオ、ファミコン、あるいは90年代からのパソコンなどの普及により、本というメディア、読書という行為が徹底的に相対化されてきたという問題がある。文庫活動の端緒において、無意識にしろ信じられていた、「本を読めば想像力が育ちよりよい大人になる」という共通感情のようなものが引き継がれなかったといえよう。それは、未来を明るく語ることでできなくなった社会全体の気分と密接につな

がっているのかもしれない。また、読書週間標語をみると、50年代から70年代にかけての「読書は人をつくる」「よい社会 ひとりひとりの読書から」「みんなで読書 明るい家庭」「あかるい家庭 たのしい読書」といった調子のものが、70年代後半からは、「本との出会い ゆたかな時間」「読書は新しい発見の旅」「キラリ 知性 秋の一冊」といったものになっている。本が他の人や、社会との関連でとらえられている様子から、全く個人的行為としてのものに変化しているように思えるのだが、この変化は、当初から文庫活動に対して投げかけられてきた「読書というものはもともと孤独なものなのではないだろうか」という問題提起が、より鋭い形ででてきたと考えることができるのではないだろうか。つまり、文庫の存在意義の問いかけである。

また、文庫の担い手の問題がある。文庫活動があのように広がったのは、女性運動としての母親運動だったからではないかと思われる。女性たちは、まず母という役割を前面にだしつつ、社会との接点をもっていこうとしたのではないだろうか。だから当然、次の段階でてくるのは、母という役割だけではない様々な要求・関心に沿った社会への関わり方だろう。また、住民運動全般にいえることだが、働く女性の増加も、主に女性が担ってきた文庫活動に大きな影響があったことは否定できない。

しかし、これらの点から、つまり、図書館の充実・読書行為の相対化・運動の担い手の問題から、文庫はこのまま衰退していくと結論づけていいのだろうか。確かに、親子読書・地域文庫連絡会の機関誌『子どもと読書』（当初は『親子読書』）は71年の創刊から25年後の、96年で終刊した。これは全国的な運動が低下、停滞してきたからではあるが、個々の文庫→地方の連絡会→全国といった流れでは一律に把握できないほど、文庫活動が規模は小さくなりながらも、多様化し、他の活動と結びついてきていること、つまり、それだけ各地方に経験が蓄積されたことを意味しているのではないかと思われる<sup>(15)</sup>。したがって、現に愛知県でもあるように、子どもとか子どもの本などを中心としながら、様々な活動をしている人たちが地域でむすびついていくことが、これからさらに広がっていくのではないだろうか。「学校図書館に専任の司書を」要求する運動なども、このような結びつきからより大きな力をもっていくのだろうと思われる。

また、読書行為が全く相対化されたからこそ、ますます子どもと本を結ぶ活動はより意識的に考えなくてはならないのではないだろうか。というのは、読書というのは、テレビやビデオより意志と能力が必要なメディアだからであり、出会いが必要なものだからである。子どもにとって最善の利益をうたう「子どもの権利条約」17条の「児童が国の内外の多様な情報源からの情報及び資料、特に児童の社会面、精神面及び道徳面の福祉並びに心身の健康の促進を目的とした情報及び資料を利用することができることを確保する」をもちだすまでもなく、子どもはいい環境で育つ権利を有しているのである。ところが現状は、図書館の数が増え児童図書蔵書が増加してはいるにしても、子どもの住居の近くに子ども自身が十分に利用できる図書館があるという理想からはほど遠いといえよう。96年現在の愛知県の図書館で、児童専用の貸出し図書館があるのは尾西市児童図書館だけで、分館があるのは7市、移動図書館を運行しているのは12市2町（17館）1広域圏にすぎない。また、図書館職員は県全体で、専任職員694名、兼任職員18名、臨時職員271名であり、専任の占める割合は71%にすぎず、しかもそのうち司書資格を持っている者は400名にすぎない。いうまでもなく、図書館業務は



高度に専門的なものであるうえ、子どもへのサービスはより細かい配慮と専門性を要求されるので、児童図書司書の育成と継続的活動は保証されなければならないのだが、人事配置に考慮をしないところもある。さらに、先進とされた名古屋市のように、コンピューター設置と引き換えに児童カウンターの閉鎖という子どもへのしわよせをおこなっているところもある。

このように列挙してみると、子どもの通える近くにミニ図書館がある、そしてそこには、本だけでなく、子どものことを思って活動してくれる大人がいる、という文庫はやはり今でも存在価値は失っていないのだと思える。それは、読書に付着していた一種の本信仰のようなものが削ぎ落とされた今だからこそ、よけい大人と子どもが本を通じて向かい合える場となっていくのかもしれない<sup>(16)</sup>。子育てと同様、ああすればこうなるとはいかない世界ではあるが、本そのものからひきだされる力だけでなく、学校でも家庭でもない場という魅力も文庫は持ち続けているのではないだろうか。

#### 註

- (1) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書（1993） 343-344
- (2) 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店（1965）
- (3) 児童図書館研究会編『年報 子どもの図書館 1981年版』日本図書館協会（1981）
- (4) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書（1993） 337
- (5) 小木曾真「子ども文庫と図書館」名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No.11（1996） 61-67
- (6) 名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No.4（1987） 3-16
- (7) 名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No.1（1977） 46-53
- (8) 名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No.1（1977） 41-45
- (9) 日本子どもを守る会編『子ども白書 1999年版』草土文化社 87
- (10) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて—全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会（1984）
- (11) 全国子ども文庫調査実行委員会編『子どもの豊かさを求めて—全国子ども文庫調査報告書』日本図書館協会（1995）
- (12) 小木曾真「名古屋市内の子ども文庫」名古屋子ども文庫連絡会『文庫のつどい』No.12（1997） 27-38
- (13) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書（1993） 371-373
- (14) 愛知芸術文化センター愛知県図書館『年魚市』第12号（1997）
- (15) 広瀬恒子は「とりくむ問題が専門的に分かれてきた」と発言している。親子読書・地域文庫全国連絡会編『子どもと読書』No.296（1996 4月号） 6-14
- (16) 「読みあい」「場づくり」という考えを示している村上李衣の実践に、なにがしかのヒントがあるかもしれない。村上李衣『読書療法から読みあいへ—「場」としての絵本』教育出版（1998）